

ホークは身体を起こした。急に重みが去る。

「そうだな。——悪い」

寝台から降りた。自分の寝台に向かいながら、

「同じ部屋で落ち着かないだろうが、我慢してくれよ」

ホークの声はもういつもと同じだった。こんなことは慣れてるのだろうか。

「あんたは、その——男色家、なのか……？」

「違う！」

ホークは叫び、すぐ声を落とした。

「と……思う。今まで、女しか相手にしたことねえし……」

「じゃあ——」

なぜ、とは口から出なかった。どんな答えであろうと、

聞いてしまうと後戻りできないような気がして。

グレイは吐息を飲みこんだ。ホークはそそくさと自分に割り当てられた寝台のブランケットをまくり上げている。

「明日はまた北エスタミルへ行くんだろ。もう寝ようぜ」

グレイが返事する前に蠟燭が消された。窓に下げられた布の端から、川面を反射する光が射しこんでいる。

外の騒ぎは一晚中続いていた。

翌日は、朝日とともに起き出した。朝食を詰めこみ、昼の分は包ませて、クリスタルシティの門を出た。

太陽の光は暖かく、空気は軽い。ホークの口も軽かったが、グレイの心は重かった。

ホークは饒舌だった。いつも以上に。

気まずい。

男色家ではない、とホークは言った。

俺だって違う。今まで男をそんな対象にしたことはなかった。

でも、タルミツタの牢獄でホークの顔を見た時、なんとなく予想していたのではなかったか。自分のところに来てくれるのは彼だと。

半歩後ろから見る横顔の瞳は、アイパッチに隠されていて、表情は読めない。

昨夜、外の通りで喧嘩が始まらなかったら、どうなっていたのだろうか。

ホークが急に足を止め、肩口にぶつかった。

「おい、ホーク。いきなり立ち止まるな」

「はあ？」

ホークは怪訝な顔をしていた。

「そろそろ昼だから、このあたりで休もうかって今言っただろ。お前も返事してたじゃねえか。聞いてなかったのか？」

「あ、ああ……そうだったな」

あいまいな返事をした。上の空で相槌を打っていただけで、会話はほとんど頭を素通りしていた。

「ほれ、あそこ」

ホークが指さす方を見た。大樹が立っていた。

「あそこで昼飯を食おう。街道から離れているから、落ちて休めるだろ」

人目は届かないが、すぐ街道に戻れるから危険は少ないだろう。

二人は木の影に座った。街道からは太い幹が二人を隠してくれる。

大樹には枝が張り巡らされ、葉が生い茂っていた。いい具合に陽光を遮ってくれてなかなか快適だ。枝葉を吹き抜ける風が汗ばむ体を冷やしてくれる。

広げた昼食の包みの中身は、なかなか豪華だった。朝早く、いやいや用意をするパブの主人にホークは凄んでいた。

「なあ、グレイ」

ホークが言った。少しうつむき、ちぎったパンの切れ端をやけに真剣に見つめている。

「もうちよつと俺たちを信じろよ」

もちろん、信じている。

答えようとした言葉を呑みこんだ。ホークの、聞いたこともない真剣すぎる声音にたじろいだ。

「そりゃ、まだ知り合って間がねえし、なりゆきで集まった寄せ集めだけだよ」

手に持ったパンの欠片を無造作に口に放りこんだ。ゆっくり咀嚼して、飲みこみ、

「グレイ。みんなお前が好きなんだ。仲間だと思ってるから、助けたいと思ってるだけなんだ」

なにを言っているのか、最初わからなかった。やがてゆっくりと衝撃が頭に浸みる。

そんなことを言われたことはなかった。生まれた時から一人だった。誰かと組んで仕事をしていても、危なくなれば見捨てていた。見捨てられたことだってある。

こんな俺を、仲間だと言って心にかけてくれる。

ホーク、あんたも……？ あんたも俺に好意を持つてくれているのか……？

グレイの心の声に答えるように、隻眼がグレイをとらえた。

「俺だってお前が好きだぜ。じゃねえとあんな危ねえ橋は渡らねえよ」

大きな手が、くしゃりと灰色の髪を乱した。

ホークの深いところに触れたような気がした。

彼は誰かを信頼することを知っている。きつと裏切られたことだってあるだろう。それでも、信じるに足る人間いると思うことはやめないし、自身も信頼されたいと思っているのだ。

だから、彼はいつも場の中心にいて慕われているのだろう。彼の持つ熱さと温かさが、グレイを救うという危険な行為に駆り立ててくれた。

「ありがとう、ホーク」

びっくりするぐらい、素直に言葉が出た。『ありがとう』なんて口に出したのは、忘れるくらい昔のことだ。

「ありがとう、か。やつと言ってくれたな」

吸いこまれそうな藍色だ。隠されたもう一つの瞳が気になって、アイパッチに手を伸ばした。

指先が触れる前に、手首をつかまれた。

触られるのが嫌なのか。

ついなれなれしいことをしてしまった。と後悔する直前に、風が灰色の髪をあおった。

思わず眼をつぶった。髪を払って瞼を開けると、夜の海色の瞳がすぐそばに――。

風に混じる葉ずれの音、長く引く鳥の甲高い鳴き声が遠くなる。

もう一度、眼を閉じた。